

I サムエル 30 章「王にふさわしい態度」

苦難の中でこそ私たちの信仰が試され、そして成長させていただけると思います。この箇所には、ダビデが大変な苦境に立たされたとき、どのように乗り越えたのかが記されています。

ペリシテ人がイスラエルと戦おうとして軍隊を召集し、ダビデと部下たちもガテの王アキシユに従って出て行きました。ところが、ペリシテ人の領主たちの訴えがあり、ダビデと部下たちはイスラエルと戦わずに済みました。主の計らいがありました。

1. 苦境に立たされたとき（：1～10）

ダビデたちの住むツィクラグに帰ると大変なことになっていました。町は火で焼き払われ、妻や子どもたちが連れ去られていました。留守中にアマレク人が襲撃したのです。ダビデと部下たちは「声をあげて泣き、ついには泣く力も無くなった」とあります。彼らの落胆の大きさが分かります。

そして、この状況においてダビデは大変な苦境に立たされました。それは部下たちが悲嘆にくれて、事の責任をダビデに負わせ、ダビデを石で打ち殺そうと言い出したのです。もともとダビデのもとに集まって来た部下たちは「困窮している者、負債のある者、不満のある者たち」でした。ダビデのもとで生活が守られているときにはなかった不満が、この悲劇によって爆発したのです。

しかし、「ダビデは自分の神、主によって奮い立った」とあります。どのようにして奮い立つことができたのでしょうか。「奮い立った」と訳されている動詞を直訳すると「自分自身を強くした」となります。そのような力がどこにあったのでしょうか。「自分の神、主によって」とあります。「自分たちの神」ではなくて「自分の神」と言える関係をダビデは神、主との間に持っていました。彼の個人的な神との親密な関係が、このような危機的な状況の中で彼に力を与えたのです。

私たちも同じように神、主に対して「自分の神」と言える親しい関係を持たせていただいています。イエス・キリストによって救われて、神との関係が結ばれました。全能の父なる神を「私の神」と呼び、信頼することができるのです。なんという幸いをいただいていることでしょうか。

ダビデは祭司エブヤタルにエポデを持って来させ、主のみこころを伺いました。8 節。主のみこころがはっきりと、しかも「必ず」「必ず」と示されました。こうして、悲しみと怒りで正しい判断ができなくなっていた部下たちをダビデは主に向かわせ、主のみこころを伺い、示されたことに従うように導いたのです。

ダビデと 600 人の部下たちはすぐに略奪隊を探して、家族を救い出すために追いかけて行きました。南に向かい、ベソル川まで来ました。戦いのために出発してからここまでの行程が続き、また大きな悲しみを経験して、疲れきって川を渡ることができなかった 200 人はそこにとどまりました。

2. 主が与えた勝利（：11～20）

追いかけると言っても、略奪隊がどのような者たちか、どこにいるかも分からなかったでしょう。その時に、部下たちが野で一人のエジプト人を見つけ、連れて来ました。その者は三日三晩何も食わず、衰弱していました。そこで彼に食べ物を与えると、元気を回復し、彼に尋ねると有力な情報が得られました。13～14 節。

ツィクラグを略奪したのはアマレク人だと分かりました。また、略奪隊はツィクラグだけでなく、その周辺の町々も略奪したということでした。そこで、ダビデはこの若者に略奪隊のところに案内することを求めます。15 節。主は「必ず追いつくことができる」とお答えになりましたが、このような導きを主がダビデたちに与えてくださったのです。

こうして、アマレク人の奴隷であった若者の案内で、ダビデたちは略奪隊のいる場所に追いつくことができました。16 節。アマレク人たちはお祭り騒ぎをしていました。ペリシテ人の地やユダの地の町々から多くの物を略奪して、有頂天になっていたのでしょうか。ダビデと 400 人の部下たちは次の一日をかけてアマレク人を攻撃しました。そして、奪われたものをすべて取り戻しました。妻も子どもたちも、家畜なども、すべてを取り戻しました。「何一つ失われなかった」とあります。主が「必ず救い出すことができる」と言われた通りでした。

さらに、ツィクラグ以外から略奪された物も奪いました。20 節。この箇所では 17 節から 20 節まで主語がダビデとして語られています。そして、部下たちは「これはダビデの戦勝品だ」と言いました。この勝利はダビデの勝利であることが強調されています。また、そのことが部下たちに認められていたということでしょう。しかし、当のダビデは自分を誇ることはありませんでした。それが続く出来事から分かります。

3. 戦勝品を分け与える（：21～31）

戦いが終わり、救出した家族を連れて、取り戻した物や戦勝品を携えて、ダビデたちはベソル川まで戻って来ました。そこにとどまっていた 200 人の部下にダビデは近づいて、彼らの安否を尋ねました。一緒に戦った 400 人の者たちの感情を和らげるために、通常の挨拶以上の態度をダビデが示したということでしょう。それでも戦いに行った 400 人のうちの一部の者たちの感情は収まりません。22 節。

このような思いは分からないわけではありません。しかし、それに対してダビデは言いました。23～24 節。主が自分たちを守り、略奪隊のところに導き、勝利を与えてくださったと主をほめたたえています。主のことばに励まされ、主が与えてくださった戦勝品なのだから、戦いに行った者にも、とどまった者にも同じように分け合わなければならないと言いました。主の恵みを皆が「ともに同じく分け合」うのです。そして、ダビデはこのことをイスラエルの掟とし、定めとしたということです。

イエス様がなさったたとえ話（マタイ 20：1～16）を思い起こします。自分のぶどう園で働く者を雇った主人が、5 時ごろに来た労働者たちの賃金を 1 デナリとし、一日中働いた者たちにも 1 デナリとしました。一日中働いた者たちは主人に不満を言いました。しかし、主人は答えました。「友よ、私はあなたに不当なことはしていません。あなたは私と、一デナリで同意したではありませんか。あなたの分を取って帰りなさい。私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。自分のもので自分のしたいことをしてはいけませんか。それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんでいるのですか」。

このたとえ話は神の恵みについて教えています。私たちがいただいた救い、そして信仰生活の様々な祝福も、神の恵みによって与えられるのです。自分の善行や奉仕や献金に対する報いとして与えられるものではありません。でも、時に私たちは他の人を見て、妬ましい思いになってしまうことがあります。自分は熱心に奉仕している、自分は多く献げているのにとつぶやくことがないでしょうか。そうではなく、奉仕できるのも献げることができるのも神の恵みが与えられているからです。何よりも罪深い自分が救われて神のものとされていることが計り知れないほどの恵みなのです。神の恵みをもっと知り、感謝したいと思わされます。そして、自分に与えられている恵みを分かち合うようにしたいと思います。

ツィクラグに帰ったダビデは、戦勝品の一部をユダ部族の町々に贈り物として届けました。主が敵に勝利させてくださり、与えてくださったものを分け与え、共に主に感謝して、喜んでもらいたいということです。

そして、その送り先のリストが 27 節から 31 節にあります。リストの最後にあるヘブロンはユダ部族の中心の町です。この後、サムエル記第二の初めに記されているのですが、ダビデがヘブロンに行き、まずユダ部族の中で王として立てられることとなります。

ここに挙げられている町々は、「ダビデとその部下がさまよい歩いたすべての場所」であったということです。サウルの追手から逃れていた時に、ダビデたちが移動していた場所で、その人々に助けを与えられたのでしょう。その感謝をダビデは忘れないで、この贈り物を送ったのです。

ダビデは大変な苦境に立たされても、「自分の神、主によって奮い立」ちました。人々と共に主に向かい、主のことばを求め、主の約束に立って行動しました。そして、主が励まし、守り、勝利を与えてくださると、与えられた恵みを皆で「ともに同じく分け合」いました。これらのことはやがてイスラエルの王となる者としてふさわしい態度でした。

私たちは王になるわけではありませんが、このダビデの態度に私たちも倣いたいと思います。苦難の中でも、「自分の神」という親しい関係を持たせていただいている神、主に信頼することができますように。そして、主のことばを求め、みこころを伺い、示されたことに従うことができますように願います。また、主が与えてくださった恵みを自分のためだけにとっておくのではなく、分け合い、感謝と喜びを分かち合いましょう。